

所員自著紹介

1. 書名：『マリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレ
1920年代ペルー社会思想史試論』
2. 著者：小倉英敬
3. 出版社：新泉社
4. 出版年月：2012年10月25日
5. ページ数：218頁

世界資本主義システムは、現在脱「新自由主義」の段階に移行しつつあり、脱「新自由主義」化と多極化が国際社会の大きな流れとなりつつある。世界資本主義システムは18世紀後半に欧米諸国に勃興して世界的に拡大し、グローバル化していったが、非欧米諸国に本格的に拡大したのは、「帝国主義」段階においてであった。

この時期にラテンアメリカ諸国では、欧米を起源とする外国資本の支配が拡大した。南米のペルーにおいては、外国資本の進出と一次産品（農鉱産物）生産の国際市場への統合に伴って大土地所有が拡大し、海岸部北部では砂糖・綿花生産の国際市場への統合、山岳部南部では羊毛生産の国際市場への統合によって、大きな社会変動が生じ、海岸部北部では独立農や地方小商人などの旧中間層の没落が生じるとともに、山岳部南部では先住民農民の共有地喪失による先住民農民の反乱や、地方都市部への移動が生じて文化変容をも生じさせることとなった。

本署は、世界資本主義システムの周辺部への拡大によって非欧米諸国においてはどのような社会変動、政治的な変化、文化変容が生じ、そしてその結果どのような社会思想上や社会運動上の変化が生じたのかを解明することを目的として、南米ペルーのマリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレの二人の思想家の登場によって生じた思想史上の動向と、彼らの指導によって生じた大衆運動の発生プロセスに見られる社会運動史の特徴を検証することによって、世界的な現象の一例を示した。

(小倉英敬)

1. 書名：『津波のまちに生きて』
2. 著者：川島秀一
3. 出版社：富山房インターナショナル
4. 出版年月：2012年4月刊
5. ページ数：245頁

本書は、東日本大震災による大津波で壊滅した三陸沿岸の漁港の宮城県気仙沼市に生まれ、育った筆者が、震災前後の文章を中心に編集したものである。本書の構成は、「序」と「津波をめぐる生活文化」と「三陸沿岸の生活文化」の三分けに分けた。

「序」では、「流されたものたちへ——家・母・漁港・漁村」という標題を付し、大津波で流された我が家の家族や住まいの思い出や、筆者が民俗学に傾倒する機縁の一つとなった、失われた気仙沼という港町の様子と、市内の漁村で出会った漁師さんとの懐旧の思いを綴った。

「津波をめぐる生活文化」では、津波常習地である三陸沿岸が、近代以降、東日本大震災まで4回にわたる大津波を経験している歴史的事実を認め、それらの各時代の津波に人々がどのように向き合ってきたか、ということを中心なテーマとしている。つまり、歴史的認識が欠如している復興計画は必ず失敗することを、背景にしながら述べた。

「三陸沿岸の生活文化」では、東日本大震災以前の三陸沿岸の生活は、どのようなものだったかを中心に、震災前後の民俗学的な論稿をもとに編集した。震災以前の人々の日常性を取り戻すことが、本来の「復興」であるならば、その日常性とはどのようなものであったかが先に問われなければならないはずである。

本書は、津波で被災した者が、どのように「津波」を捉えていくべきかを、必死で書き綴った、1年間の記録集でもある。

(川島秀一)

1. 書名：『表象のヴェネツィア—詩と美と悪魔』
2. 著者：鳥越輝昭
3. 出版社：春風社
4. 出版年月：2012年11月
5. ページ数：400頁

都市ヴェネツィアをめぐる表象の歴史を綴った書である。18世紀を前史とし、おもにその末年から20世紀半ばまでの150年間を扱う。

東地中海とイタリア本土に領土を持つ帝国だった都市国家ヴェネツィアは、1797年に滅亡した。経済的・外交的に手強い存在だったこの国家が消えると、あとには繁栄した都市としての記憶が残った。以後、ヴェネツィアは、もっぱら語られる都市、描かれる都市に変わった。表象されることを最大の特徴とする都市になったのである。

本書は、バイロンやディエゴ・ヴァレーリの詩、ベッリーニやオッフェンバックの歌劇、ターナーやホイッスラーの絵画、ヴィスコンティやデヴィッド・リーンの映画など多様な分野の作品を取り上げながら、そこに見られるヴェネツィアの表象の特徴を掘り下げてゆく。

これらの作品に見られるヴェネツィアの大きな特徴は、詩的存在になったこと、美的存在になったこと、魔界幻想をかき立てること、異文化性が際立ったこと、前近代性が目立ったことである。それらの特徴がこの町の魅力を生み出してきた。

本書は多分野にまたがるだけでなく、地域的には英国・フランス・ドイツ・イタリアで作られてきた作品を分析対象とし、そこに表れるヴェネツィア像を分析するから、18世紀から20世紀半ばにいたるヨーロッパ文化史の側面も持っている。

都市ヴェネツィアについて、その表象の歴史を、これだけの分野と地域とにわたって取り上げた書物は類例がない。

(鳥越輝昭)

1. 書名：(神奈川大学言語学研究叢書3)『古代中国語のポライトネス—歴史社会語用論研究』
2. 著者：彭国躍
3. 出版社：ひつじ書房
4. 出版年月：2012年11月

本書は、古代中国語の敬語問題に関する初の専門書である。歴史社会語用論の視点から、古代中国語敬語表現の運用実態、言語規範、副詞体系およびその訓釈の歴史を明らかにすることにより、言語の普遍的な対人機能—ポライトネスの起源と変遷を探究する上での中国語モデルを提供する。

本書の構成：第1章古代中国語における〈死亡〉の社会的変異—『史記』言語運用の研究(1. はじめに, 2. 用語の定義と作業仮説, 3. 異形の形態と意味の分析, 4. 社会的階層の分析, 5. 異形の社会的階層分布, 6. まとめ), 第2章古代中国語における呼称の社会的変異—『禮記』言語規範の研究(1. 研究概要, 2. 身分・階級による社会的変異, 3. 場面・状況による社会的変異, 4. 呼称変異の文化的背景, 5. 結論), 第3章古代中国のことばの禁則と社会的コンテクスト—『禮記』言語規範の研究(1. はじめに, 2. 『礼記』言語禁則の概観, 3. 言語行為の禁則, 4. 言語随伴要素の禁則, 5. 話題内容の禁則, 6. 結論), 第4章上古中国語の副詞型敬語の研究(1. 研究概要, 2. 先行研究, 3. 問題提起, 4. 文法機能に基づく下位分類, 5. 敬謙副詞の例証, 6. 結び), 第5章漢代鄭玄が訓釈した古代中国語の対人関係機能について—歴史語用論のアプローチ(1. はじめに, 2. 研究概要, 3. 鄭玄の対人関係機能の術語とその訓釈例, 4. 鄭玄の対人関係機能訓釈の特徴, 5. おわりに), 第6章歴代訓詁学者のポライトネス訓釈—解説と資料(1. 解説, 2. 資料：公羊高, 穀梁赤, 毛亨, 孔安国, 揚雄, 許慎, 王逸, 馬融, 趙岐, 服虔, 鄭玄, 何休, 高誘, 王肅, 杜預, 王弼, 范寧, 皇侃, 孔穎達, 楊士勛, 賈公彦, 李善, 楊倞, 邢昺, 孫奭, 呂大臨, 陸佃, 朱熹, 錢果之, 陳澧, 張自烈, 汪瑗, 錢澄之, 劉淇, 王夫之, 孫希旦)

(彭国躍)

1. 書名：『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史』
2. 訳者：渡辺美季（著者：グレゴリー・スミッツ）
3. 出版社：ペリかん社
4. 出版年月：2011年10月
5. ページ数：284ページ

本書は一九九九年にハワイ大学出版会から刊行されたグレゴリー・スミッツ（Gregory Smits）氏（現ペンシルバニア州立大学准教授）の著作 *Visions of Ryukyu: Identity and Ideology in Early-Modern Thought and Politics* の邦訳である。

本書は、中国・日本との君臣関係が同時に維持されていた近世琉球（1609-1879年）の時代に四人の知識人—向象賢（羽地朝秀）・程順則・蔡温・平敷屋朝敏—が描いた琉球像（Visions of Ryukyu）に着目し、王国の自律性の在り方を考察する。そこでは、近世琉球の国際的立場が四人の琉球像に多様性と切迫性を与え、最終的には理想的な儒教社会として可能な限りの自律性を琉球に付与しようとした官僚・蔡温（1682-1762年）の琉球像が最も影響力を持ったものの、その像は常に王国の支配階層である良人（士）による政治的闘争の中で揺らぎ続けたことが、史料を通じて実証される。またとりわけ蔡温の琉球像とそれに基づいた国作りが詳細に分析・検討され、同時代の中国や日本との比較により相対化された上で、その歴史的固有性が指摘される。さらに本書では、このような近世琉球がいかなる「国」であったのか、国民国家との対比を用いて検証されている。

私は2001年の夏に本書に出会い—まだ大学院生だった—、その極めて明快な自律性論と、琉球に固有の史的現象を広い視野から論じる記述姿勢に感銘を受けた。しかし英語という言語の壁が大きかったせいか、当時もその後も日本の学界において本書は十分に読まれているとはいえない状況にあった。その状況を（やがて知り合い友人となった）著者とともに残念がっていたところ、原書刊行から十年以上を経て、幸いにもペリかん社から邦訳の刊行が決定し、著者が私を訳者に推薦してくれた。拙い英語力ながら、著者自身を含む数名の強力な協力者に助けられ、どうにかこう

にか翻訳を完了し、刊行に至ったものが本書である。不肖の私には、著者の細部まで配慮の行き届いた美しく明晰な英文を、同じレベルの日本語に置き換えることは叶わなかったが、本書の伝えたいことをいささかなりとも損なわないように、そこにだけは全力を尽くしたつもりである。本書が広く日本の読者に読まれ、さらなる議論の起点となることを願ってやまない。

（渡辺美季）

1. 書名：『近世琉球と中日関係』
2. 著者：渡辺美季
3. 出版社：吉川弘文館
4. 出版年月：2012年6月
5. ページ数：316ページ

本書は、2008年2月に東京大学大学院人文社会科学系研究科より博士学位を授与された論文『近世琉球と中日関係』に加筆・修正を行ったものである。

近世の琉球（1609-1879年）は、日本と中国の「狭間」にあつて、どちらにも包摂されない特異な地位を維持した。本書では、この時期の琉球の国際的位置がどのように形成され、かつ維持されていたのかが、東アジアの国際状況—とりわけ中日関係—と琉球の国家的営みの両面から検証される。

本書は三部から構成されている。第一部「狭間の形成」は三章からなり、16世紀前後の東アジアの動乱の中で、近世琉球の国際的位置がどのように形成されたのかが、中日関係との連動性という視点から考察される。四章からなる第二部「狭間の運営」は、琉球・清朝の間の漂流・漂着問題に着目し、清の成立（1644年）によってほぼ確定した琉球の国際的位置が、その後比較的安定的に保たれた要因を琉球の側から分析するものである。第三部「狭間の思想」は一章からなり、近世琉球において成立した国家的自意識において、中国・日本と琉球との関係にいかなる政治的意味が与えられたのかを、「御勤」と「御外聞」という

概念を手掛かりに考察する。最後に終章において本書の分析成果を総括し、そこから導き出し得る近世琉球の国家的特質と歴史的意義が指摘される。

外見も中身もいわゆる“お堅い”学術書だが、琉球史を全く知らない人が読んでも理解できるように最大限の配慮をしたつもりである。今は日本の一部となったかつての琉球王国は、中国・日本に同時に従う状態でなぜ長期にわたって王国を維持し得たのか——ご関心のある方は本書をお手に取っていただければ幸いである。

(渡辺美季)